

IV-45

住宅地における人の緑に対する認識と評価

東北大学 学生員 ○田澤 光治

東北大学 正会員 平野 勝也

東北大学 正会員 稲村 肇

1. はじめに

近年、都市や居住地域での自然や緑に対する関心が高まる中で、都市計画における緑地の配置が問題となっている。しかし、実際の緑地計画は、都市公園法より機能、利用対象で分類され、それぞれ面積、誘致距離が決められた画一的・機械的なものであるため、必ずしも満足できるものとは言えない。人が満足できる緑地を考えるには、人の緑に対する認識の構造を明らかにし、その緑を評価することが必要となる。従来、都市の緑に関しては多くの研究がなされてきたが、人の側から見た緑地計画の研究は少ない。例えば、増田（1987）¹⁾らは緑と関わる機会が最も多いと思われる主婦のみを対象とした調査を行った。また中村（1995）²⁾は日常利用する道と緑の関係の考察している。両者の研究はその手法面では高く評価できるものの、対象や視点が極めて限られたものになっている。

そこで本研究は手法的には上記の方法を踏襲しながら、緑の評価は様々な視点から見た人と緑の関係や効果を総合して行われるべきであるとの基本的認識の下に、人の世代、行動から見た緑の認識の構造を明らかにし、その緑を評価することを目的とする。

2. 研究方法

2-1 対象地区及びアンケート実施結果

長期的研究対象は都市、郊外、住宅地といった全ての生活環境であるが、本研究は其中で住宅地を対象に人の緑に対する認識構造に焦点を絞った。

ケーススタディーとしては仙台市を取り上げ、アンケートを基礎に分析を行った。対象地区は緑の量が多いニュータウンの高森、比較的少ない昔からある住宅地の上杉、その中間の住宅地として八木山を選んだ。

アンケートは高校生以上を対象とした各家庭に複数枚配布した。有効サンプルは、高森地区 100（配布世帯数 100）、上杉地区 95（配布世帯数 120）、八木山地区 116（配布世帯数 100）であった。

2-2 アンケートの主な内容

アンケート方法として、回答者に思い描いた緑をあげてもらうため、サインマップ法を用い、いろいろな世代で調査を行いたいため1件につき3人に回答を求めた。アンケート項目は、年齢の他に「行動目的別の日常生活で通る道」「印象的な緑」を地図上に自由に記入してもらうものとした。ここでは「印象的な緑」を緑の認識として捉え、その結果から世代と緑の認識の関係、行動と緑の認識の関係を考察し、それらで認識されている緑を評価する。

2-3 分析方法

- ①「日常生活で通る道」「印象的な緑」のそれぞれの個人データを地図上に重ね合わせて集計する。
- ②「印象的な緑」は、記入数の多い上位5ヶ所 街路樹、自然公園、公園（児童公園）、公共施設の緑、生垣・庭木、とした。（但し上杉は4ヶ所）
- ③次に示すデータをサインマップより集計する。
 - (1) 世代別の「印象的な緑」の個数を調べる。
 - (2) 行動目的別のルート上に接する「印象的な緑」の個数を調べる。
- ④人の認識する緑の質・量・配置について評価する。

3. 結果および考察

3-1 緑の認識の構造

(1) 世代別の緑の認識の構造

高森地区での世代別による緑の認識を図-1に示す。この図から児童公園の認識は30~44歳代が一番高く、年齢を増すごとに認識は少なくなる。また年齢が増すごとに生垣・庭木の認識が高くなっている。これらの違いは行動（公園の利用など）によるもの

と考える。そこで次に行動と緑の関係を調べる。

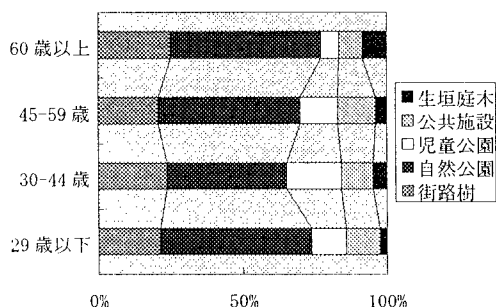


図-1 世代別の緑の認識（高森地区、100人あたり）

(2) 行動別の緑の認識

全体での行動別の緑の認識を図-2に示す。人は散歩を通して一番緑を認識している。行動別には、買い物と通勤通学で同様分布を示しており、街路樹を最も多く認識している。散歩での認識は他の2つと違い、公園の緑が最も認識され、生垣・庭木の認識も多い。

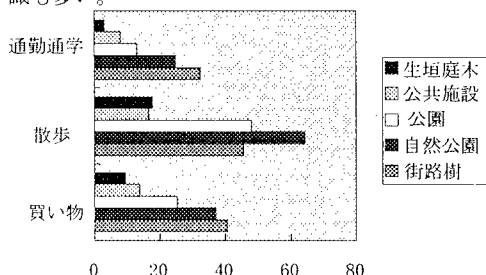


図-2 行動別の緑の認識（全地区、100人あたり）（％）

3-2 緑の評価とその認識

対象地区それぞれの「印象的な緑」の記入数を緑別に図-3に示す。

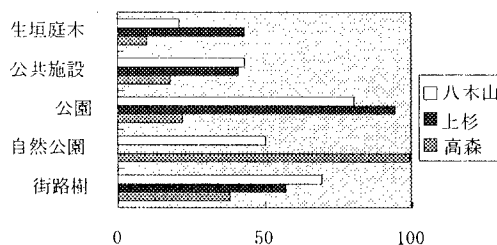


図-3 印象的な緑の記入数 (人)

八木山地区と上杉地区には、広いバス通り1本にしか街路樹はないが多く認識されている一方、多く配置されている高森地区では少ない。これは前者の街路樹が幹線道路にあり、木の高さもあって緑量が

多いことにあると考える。またバス通りの街路樹と比較して、区画道路の認識は少ないことが分かった。

対象地区で認識された公園は全て市街地の方向にある。すなわち人の生活空間の広がる方向にある公園が強く認識されている。また高森地区において、3つの同規模の公園では、通りから一望できる東公園が最も認識されている。また同地区の2つの児童公園のうち大きい公園に隣接して配置してある公園は住宅地内の公園と比較してあまり認識されないことが分かった。

建築協定により生垣の絶対量が多い高森地区において、それを認識している人が少ない一方、各家庭が個性を出している上杉地区では認識者が多い。このことは、量が多くても画一的なものでは認識が少ないことを意味している。

4. 結論

本研究で得た主な結論を以下に示す。

- 1) 児童公園の認識が世代で大きく異なること。そのため、複合的な公園の計画が必要である。
- 2) 通勤通学、買い物で利用される大きな通りには街路樹が有効である。散歩においては、人の散歩する距離内に公園を配置するのが良いと考える。
- 3) 公園の認識は大きな通りに接し、人の生活空間の方向に配置されるものの認識が強い。
- 4) 大きな緑地（公園など）に隣接する小さな緑地は認識されない。
- 5) ニュータウンにおいて、生垣や街路樹は量（数）が多くても、画一的なものでは強く認識されない。

参考文献

- 1) 増田：日常生活行動領域における緑のイメージ構造に関する研究，造園雑誌 vol. 50(5)，p315~320，1987
- 2) 根本：居住環境における緑の質と住民意識の関係，日本都市計画学会学術研究発表会論文集 18号，p91~96，1983
- 3) 岩戸：都市開発における緑地の質・量・配置の考え方，東北大学卒業論文，1994
- 4) 中村：都市開発における緑地評価の実証分析，東北大学卒業論文，1995